雇用の調整弁としての非常勤講師－労働実態と今後の展望－

2023年2月16日

岐阜大学等 非常勤講師　　天池　洋介

私は岐阜大学などで非常勤講師をしております天池です。まず東海大学の方で、先日1名の方が雇用復帰できたということで、大変喜ばしい事態と思っております。皆さんがご支援していただいたからというふうに思います。かなり画期的な事態かと思いますので、この流れを後押しできるようお力になれればと思っております。

１，自己紹介

私は岐阜県可児市というところの出身で、現在は岐阜県の大垣市に住んでおります。年齢は43歳になりました。埼玉大学で元々哲学を専攻していたのですが、2002年の卒業でして、就職氷河期が一番ひどかった時代です。小泉構造改革が真最中の時代に卒業しまして、仕事がないのは自己責任という時代だったので、岐阜に戻ってある協同組合に勤めておりました。ただしそこの労働条件がかなり厳しくて、あと度重なるパワハラ等もありまして、1年半ほどで体調崩して辞めました。その後、就職が厳しかった時代ですので、塾の講師だとか、大手製造業で派遣をしたりとか、様々な仕事を転々としていましたが、どこに行っても労働条件が悪いということを痛感しました。これは転職しているだけではダメだなと思って、当時27歳の時に個人加盟労働組合の岐阜青年ユニオンを仲間と一緒に立ち上げて、その後10年ほど役員として労働相談とかの活動をしてきました。

その過程で社会のことを知らないと、いくらブラック企業と闘っていても、根本的にブラック企業が生まれる社会経済システムを変えなければ意味がないと思いまして、名古屋大学の大学院で理論経済学の研究を始めました。最初はマルクス経済学をやっていましたけれど、ケインズ経済学とか制度経済学とか様々なことを研究していました。結局その中でもっと研究したいと思いまして、博士課程の進学を希望したのですが、アカデミックハラスメントで大学院を追い出されました。その後、2年ほどパートで仕事していましたが、名古屋大学の今度は教育学研究科で北欧の研究をやらないかというお声をかけていただきましたので、33歳の時に博士課程に進学をしました。ここでも指導教官の度重なるハラスメントや、指導拒否などもあったのですが、9年間かけて博士論文も書き上げて、なんと実は今年の3月末で博士号を取得するということが決定しました。本当に9年間もよくやったなと思います。

このような話は私自身だけではなくて、他の非常勤講師とか大学の教員の皆さんも多分同じような経験をされていると思います。現在、岐阜県と愛知県の複数の大学、そして看護学校で授業を担当しています。そういった私自身の状況も踏まえて、お話ししたいと思います。

大学の非常勤講師も2種類ありまして、いわゆる常勤、正規雇用で仕事しながら、週に1回とか2回、別の大学に非常勤講師で行くというパターンの先生がたくさんいらっしゃいます。しかし今回お話しするのは、いわゆる正規雇用ではなくて非常勤講師の仕事だけで生計を立てている、そういう「専業非常勤」と業界では言われていますけれど、非常勤講師だけをしている、そういった非常勤講師のお話をしたいと思います。

２，非常勤講師の特殊な労働実態

労働条件についてですが、非常勤講師の労働条件はかなり特殊です。これがなかなか分かりにくいですが、まず賃金はいわゆる時給ではないです。1コマ90分間、90分で1単位の授業としてやっているわけですけれど、この90分でいくらという賃金の支払われ方をしています。例えば、1コマ90分の授業をやったら1万円で、全15回、テストがある場合には16回ですけれど、全1

5回の場合は15万円という、そういう計算をしています。なので一般的な1時間働いたからいくらということではないです。これがすごい問題で、まず1つ目の問題が、相対的貧困水準が200万円以下だと言われていますが、この200万円を稼ぐためには年間13科目もの授業を担当しないといけないということです。この13科目というのは、かなり多いです。

どういう意味で多いかというと、1つ目が13科目もやると仕事が大変だ、仕事量が多いということが一つと、もう一つが非常勤講師として13科目も探せないということです。13科目をいろいろな大学の授業に応募して、その担当者になるというのは、結構ハードルが高いです。そして担当する学生数が多くても少なくても全く同じ金額です。例えば語学は英語だとかドイツ語とかフランス語とか中国語みたいな外国語の担当者の場合は、授業の人数が上限、例えば 40人とかに決まっていて少ないのですけど、私が担当した中で一番多かった科目は220人ぐらいもいました。220人担当しても20人担当しても、だいたい1万円ということで、人数が多いとそれだけ出席のチェックとか、採点がめちゃめちゃ大変ということがあって、大変な思いをするということがあります。さらに、この1コマ1万円という中に、教材費とか機材、今、オンライン配信ソフトのZoomを使っていますけれど、このZoomの契約費用とか、印刷代とかプリント代とかパソコン代とか、そういったもの全てが自己負担です。これはかなりの費用になります。というのでなかなか賃金が大変だというのが1つ目です。

2つ目は労働時間です。これが先ほどの賃金とも連動する話ですけれど、さっきの90分だけでは当然、仕事が終わらないわけです。授業時間以外に、まず事前に授業の準備がありますし、授業が終わったら採点という労務があって、それら全て込みで1万円です。後で詳しく説明をしますが、どんな仕事があるかというと、授業前だと、前年にシラバスという時間割で授業計画の作成をします。そして授業の前日までに教材の準備作成をしなければいけませんし、授業の当日になると資料の印刷があります。そして授業をする前に教室に行って、今コロナで大変なので換気して、大学によっては消毒もして、パソコンを立ち上げてということをします。授業の終わったあととか授業中に学生から質問を受け付けて、そして教室を片付けてということをしなければいけないです。そして、授業が終わった後に出席のチェックをして、期末の時はテスト作って、テストして、採点して、成績つけて、成績で落としてしまった学生については、追試をします。さらに、学生からこの授業についてよかったかどうかみたいなことをアンケートで受けて、その集計結果が送られてきて、その集計結果について教員がコメントして、自分の授業を振り返らなければいけません。

とにかくやることがめちゃめちゃあって、このような「授業」以外の仕事がたくさんありますが、給料は「授業」にしか払われないです。それ以外の仕事がめちゃめちゃ多くて、すべてコミコミで1万円が高いか低いかということはありますけれど、私は若干少ないかなという気はします。この非常勤講師の仕事に就くためには、いわゆる研究者としての研究実績が求められます。大学によって今年1年間あなたはどんな研究しましたか、どこの学会、どこの雑誌にどんな論文を発表して、どんな本を書いて、どんな学会で研究発表してみたいなことを報告しなければいけないです。そのような報告義務もあるにもかかわらず、研究には賃金が一切払われないという矛盾があります。

雇用形態についてですが、これもかなり特殊です。現在、東海大学とかでも争われて、東海大学だけではないですが、理研とか日本中の研究機関で問題になっているところの雇用の話でもありますが、非常勤講師は多くの場合で半年契約になります。なぜ半年かというと、授業の開講期間が半年だからです。前期と後期に分かれている大学が多く、他に3学期制のところもありますが、基本的には前期が4月から8月、後期が9月から2月という形で前後期に分かれていて、それぞれ授業が前期に15回、後期に15回という形です。例えば私の場合ですと岐阜大学では前期が1年生向けの経済学入門、後期が地域科学部の２，３年生向けの労働経済学というふうな担

当をしておりました。そのため、その授業を担当している時だけの雇用ということですし、逆に言いますと、この授業と授業の合間に夏休みが1ヶ月半くらい、春休みが2月中旬から4月初旬まで2ヶ月間あり、その授業のない期間は無収入です。

その時期にアルバイトすればいいじゃないかとよく言われますが、この時期には研究しなければいけないのと、あと授業準備をしないといけません。次の学期の授業の教材とかを作っておかないと、いざ授業が始まってしまうと、授業するだけで手いっぱいになってしまうのです。このように授業準備しなければいけないので、アルバイトもできませんし、そもそも中途半端な時期だけ就けるアルバイトってなかなかないです。結果として、非常勤講師は収入が厳しくなります。

また、社会保険については未加入です。福利厚生、賃金以外で入ってくる収入というのは交通費のみです。しかもひどいことに交通費も払わない大学もあり、本当にけしからんなと思います。大学が広範囲に分散して立地しているため、非常勤講師はけっこう遠方から通うことが多いのですが、例えば私ですと一番遠い大学が片道100キロです。通勤時間が2時間弱で、交通費が片道2,000円、往復4,000円かかります。そこでもし交通費が払われないとすると、手取りがだいぶ減ってしまいます。教材費、機材費、研究費などの必要経費、そして年金、社会保険料などの福利厚生、そして私の場合は奨学金の返還もあります。私は450万円の奨学金を借りていますので、まだ返済できてないですけれど、それも全部返そうと思うと手取りはかなり少ないということが実際としてあります。

３，就業資格

このような非常勤講師になるために求められる就業資格ですが、専門分野の大学院の修士課程修了が求められます。大学は4年間ありまして、その4年間終わった後は大学院がありますが、2年間の修士課程があって、その後に3年間の博士課程があるという形になっています。修士課程は博士前期課程とも言いますが、その2年間を終えていれば、だいたいどこの大学でも非常勤講師として雇用されると思います。ただし、ここで問題なのは大学4年間、修士課程2年間、合計6年間も大学に通って、1科目15万円の仕事を引き受けられるかどうかです。他のフルタイムの仕事をしながら、この非常勤講師の仕事をするということは、基本的に難しいと思います。フリーランスの方とか、自分で事業をされている方だとか、本当に理解のある職場の方であれば可能ですけれど、ほとんどの人はフルタイムの仕事があると非常勤の仕事ができません。どうしても兼業になってしまうので、実際には大学院生、博士課程の大学院生か、無職の方か、専業非常勤の方に限られます。

さらにその後、正規の大学教員になろうと思うと、大学院の博士課程を終了することが求められます。博士の学位は最短3年で一応取れますけれど、私の研究分野である経済学だとか教育学のような人文社会学系など文系の分野では、だいたい9年間かかる人が多いです。最近はだいぶ9年間よりも短くなってきてはいますけれど、私も9年間ギリギリかかりました。なぜかというと、博士論文の提出要件のハードルがかなり高いからです。私も去年まで苦労していましたけれど、かなりの量の研究を求められるからです。私が博士課程に入学した頃には、博士論文を書くには積み上げて自分の身長と同じくらいの資料を読み込まないと、博士論文なんか書けないと言われましたが、全然身長どころではないです。4人分か5人分くらいの資料を読み込まないと書けませんでした。さらに私の場合は北欧の研究をしていますので、英語とスウェーデン語が読めないと全然論文が書けなかったので、英語とかスウェーデン語の論文がなんとか読めるようになるまでに、3〜4年かかりました。

生活するために非常勤講師をしていると研究する時間がなくなりますし、研究していると非常勤講師の収入がなくなって、生活費がなくなってしまうというジレンマがあります。結局、

研究ができない、そして博士課程を終了することができない、正規の教員になれない、結果として非常勤講師の仕事で生活をつなぐ専業非常勤になってしまうというような形の方が多いと思います。私もそうです。

４，労働市場・キャリア形成

非常勤講師の労働市場とキャリア形成についてですが、非常勤講師の仕事にどうやって就くのかと、学生からも時々質問があります。非常勤講師の労働市場は、ほぼ人的ネットワーク、いわゆるコネによる紹介によって非常勤講師になるというのが、圧倒的だと思います。一番多いのが知り合いの専任教員から、「うちの大学でこの間、定年退職で辞められて、その後の授業やる人がいないのでどうですか」みたいな声がかかるとか、あるいは「自分自身が別の大学に非常勤講師として行っていたけれど、仕事が忙しくて非常勤を他の人にやってもらいたいと思っているのでどうですか」とか、そういったふうにお声がかかります。あるいは非常勤講師の間で、「こういった仕事で声をかけられたけれど、僕は無理だから他の人で誰かどうですか」とか、メーリングリストとか SNS の中で、「どこどこで空きがあるから誰かやってみませんか」みたいな募集がかかることもあります。もちろん大学院の中でも大学院生の中で情報のネットワークがあり、そこで人を探すということも一つです。公募で出ることもありますけれど、公募でつくパターンは多分あまりないと思います。ほとんどがいわゆる人的ネットワークでつくということが一般的です。アルバイトとか新卒採用みたいに、一括でごそっと取るというよりも、空きがあった授業、岐阜大学の経済学の授業の担当者が空いたから、その分を適宜補充するというポスト制です。これは大学の世界はどこも一緒だと思います。

そういう形ですと、やはり大学が集中する首都圏、関東圏と関西圏では、非常勤講師として生活が成り立ちやすいという特徴があります。なぜかというと、1日に数件の授業を担当できるからです。これは一つには大学が多いので、そもそも募集しているポストが多いということと、もう一つは鉄道などの公共交通機関が発達していて、例えば午前中に東京都のA大学に行って、午後から神奈川県でB大学に行くということが成り立つわけです。しかし、他の地域だと、これがなかなか難しいです。そもそも大学が少ないので、たくさん授業がないということもありますし、大学と大学の距離が離れているので、午前中に行って午後から別の大学に行くということは、かなり難しいということになります。名古屋周辺であれば、岐阜県の私もギリギリできますけれど、朝一番の授業に行って、その後に午後1番の授業に行くというのは、結構きつくてギリギリです。場合によっては授業の開始に間に合わないということがあるので、朝一番の授業と午後2番目の授業みたいな組み合わせになります。

非常勤講師の職歴についてですが、非常勤講師をたくさんやっていると、非常勤講師として別の科目を引き受ける際には大変有利です。ある大学で「この科目やっていらっしゃるんだったら、この科目もぜひうちでやってください」みたいな話はすごくあるので、いくつか非常勤講師としての職歴の積み上げがあると、非常勤の科目を担当する分には大変有利です。しかし、非常勤講師の職歴というのは、正規雇用の常勤教員に応募するには、あまり有利にならないのかなという気がしています。なぜかというと大学の専任教員の仕事は、現在ほぼ公募になっていて、みんなで応募してくる形なのですが、研究実績と実務の実績を優先するように履歴書もそういう形式になっています。要するに研究者として優れている人や、もしくは専門的な実務の実績のある人、例えば社会福祉士として何年間勤めてこんな実績を上げましたとか、学校の先生としてこんな教育をしてきて、こんな実績がありますとか、そういう人が求められています。いわゆるアカデミックな国立大学とか有名私立大学は研究実績を、そして地方の私大とか短大とかについては実務の実績を優先しているような気がします。そこではいくら非常勤講師の経験があっても、生かされないです。

また、大学に応募する書類を書くときに、ものすごい手間がかかります。この書類作成作業については、本当にいい加減にしてくれと思いますけれど、まず書式が大学ごとに別の書式なので、書くことはほとんど一緒ですけれど、全部コピペしなければいけないです。様々な大学に応募する都度、履歴書も含めて全部コピペして、作り直さなければいけないから、1日とか1日半かかって作成し、送っています。それでは、結果はいつも箸にも棒にもかからないということがあって、悩ましいなと思います。普通のお仕事の場合はキャリア形成で、新人として就職してから一定の仕事をしてきて、それが評価されて次にステップアップしていくということになりますが、非常勤講師の場合はそれが繋がらないです。そこがやっぱり辛いところで、じゃあ研究したいと思って研究すると、収入がなくなってしまうので、どうしようもないのです。

私が一番つらかったことは、ある大学で一生懸命に授業していて、4年ぐらい担当していた授業があったのですが、そこの授業を担当する専任教員の公募が出たのです。張り切って応募したのですが、結局、私は落ちて別の人が担当するということになりました。ずっと低賃金を我慢して一生懸命やってきた科目を、全然知らない別の人が正規教員として担当することになるということが、すごくつらかったです。そういうことがあって、これはポスト制なので仕方がないところはありますけれど、努力が全く報われないという特殊な世界かなというふうに思います。

５，労働実態（日々の授業準備、授業計画の作成など）

労働実態について、大学の非常勤講師がどんなふうに仕事をしているのかということについて、私の事例なので他の方はちょっと違う場合もありますけれど、イメージしやすいように仕事の概要についてお話しします。さきほども少しご紹介しましたが、授業開始までと、授業が始まっている時期と、授業が終わった時期と3つに分けてお話をします。

＜授業開始前＞

給料が出るのは授業をしている90分だけですが、授業が開始する前、まず前年度、今2022年度ですが、2022年度の授業を始めるには、その前の年の2021年度の年末の11月末から12月末までの間に、次年度の授業の打診があります。「来年度、この授業について担当してもらえますか」、「もし担当してもらえるのであれば何曜日のどこの時間帯に入ってもらえますか」というような打診と調整があります。これはけっこう大変で、もちろん私は基本的に打診を受けた科目は全て断らないのですが、例えば月曜日の一番最初、9時からの時間に岐阜県の大学で授業があって、次の10時半からの時間帯に名古屋市内で授業があっても、その間に15分しかないので行けないわけです。そうすると、どちらかをお断りしなければいけなかったりとか、あるいは時間帯をずらしてもらおうとすると、「いや、その時間、何曜日のその時間帯は、この学年の生徒たちは別の授業を受けなければいけないのでダメです」とか、そういったことがいろいろあって、パズルを組むように授業時間割を作っています。私は５つか６つの大学で授業があるので、それぞれ「A大学が決まったので、B大学はこっちでお願いします」みたいなやり取りしなければいけないから大変です。

さらに、その時間割調整が終わったら、前年度の12月から1月中旬ぐらいまでの間に、授業計画（シラバス）を書きます。このシラバスに書く内容ですが、授業の概要、例えば労働経済学の授業ですと、授業でどんなことをやるのか、経済学的な観点から労働市場を考察するだけではなくて、労働に関係する基本的な法律や権利の話、あるいは労働災害や労災保険の話、あと働きがいだとか、就職活動について、全体的に学びますというようなことを書きます。その上で、最近は学生がどんな能力が身についたかみたいなことを書かなければいけなくて、労働市場について基本的な理解ができるだとか、労働に関する基本的なルールについて自分で説明で

きるとか、そういった何ができるかということを書きます。そして全15回あるいは16回の授業計画を書きます。第1回目はどんな内容で、第2回目でどんな内容かということを全16回分書いて、成績評価の基準、私の場合は1回出席するごとに毎回最後に課題と感想文を記入してもらいますけれど、課題を毎回出して、その出してもらったシートが1枚3点、全15回あるから全部で45点、そして期末テストが55点、足して100点で成績評価しますということも書いています。私は結構シラバスを書くことは好きですけれど、今年は14科目ありましたので、全14科目を書くだけでも大変です。1回提出して、提出した後にまた訂正がある場合があるので、訂正の指示があったら訂正して再提出するということをやっています。

それがクリアされると、前年度の3月末、契約書類とか手続き書類が一斉に郵送で送られてきます。雇用契約書、入構手続きの申請書類、交通費の申請書類、走行距離と公共交通機関の場合はどの公共交通機関で来て、それぞれいくら切符代がかかるのかみたいなことを書いて出します。ITシステム利用の申請書類、給与の振込手続きも結構大変ですが、これを大学ごとに行います。あと私の場合は、一度授業が始まってしまうと、土日関係なく授業準備が入ってきて休みが全くないので、この長期休暇中に授業の教材、パワーポイントのスライド、プリントを事前に用意します。大学では90分間授業をしますが、90分間ずっと喋っていると学生は寝てしまうので、私は30分か40分以内にしています。残りの30分ぐらいで映像を見てもらったりだとか、あるいは資料を読んでもらったりとかして、課題に取り組んでもらうということをやるので、その課題用の映像とか資料を準備しておくということを、この時期にやっています。

＜授業時＞

そして4月あるいは9月、10月に入って授業が始まります。授業が始まると、まず前日までに授業で使うスライドやプリントや映像とか教材類を全て用意・確認します。基本的には長期休暇中に準備をしていますけれど、授業をしていく中で、ちょっと難易度が高いかなとか、逆にちょっと難易度が低すぎたかなとか、あるいは学生でこういった分野に興味がある人が多いので、ちょっと内容を変えようかなということがありますので、随時、スライドやプリント、映像等も切り替えながら準備をしています。

そして特に現在、コロナ禍ということで、電車では満員電車に巻き込まれないように、車で行く場合も渋滞に巻き込まれないようにして、私は授業開始の1時間前に大学に到着するようにしています。なぜかというと、もちろん授業に遅刻するわけにはいかないということが一つと、もう一つには非常勤講師は朝一番の授業が多いです。朝一番の時間帯ですと、印刷室がめちゃめちゃ混むわけです。皆さん一斉に印刷されるので、印刷室が混みあうのを避けるためにも早めに行くようにしています。大学に着いたら忘れ物を確認して、出勤簿を押して、資料類の印刷をします。これらの作業で15分くらいです。

その後、教室に行って、教室の準備です。コロナウィルスに感染しないように窓開けて、パソコンの電源を入れて、マイクとか映像用のスクリーン、プロジェクターの準備とか全部して、資料を配布してとやっていると、印刷も含めてだいたい30分か35分ぐらい、印刷物が多いと40分くらい準備にかかります。その後、90分間の授業をして、授業が終わったら学生の質問を受け付けたり、学生と雑談しながら教室の片付け、パソコンの電源を落として、オーディオの電源を落として、窓を閉めてとかやります。次の授業の先生が早めにいらした場合には、授業が終わったらすぐに教室に入って来られることが多いので、急いで鍵を返して、黒板消してとかやって、とりあえずおしまいです。

授業後は、非常勤講師の控室がある大学では他の非常勤の先生方がいらっしゃって、「今日は暑かったね」とか、「今回の授業はみんな寝ちゃった」とか、そういった情報交換をします。この情報交換の時間に、実は「労働組合に入りませんか」という話とかもしています。あるい

は労働条件の話です。「来年度、外国語の科目は減るらしい」とか、そういった情報交換をしていますので、そのタイミングで少し組合の話をしてみるということもしています。その後、学生の感想文に目を通して返答する形で授業通信を作成をしています。だいたいA4で5ページから10ページの間ぐらいです。コロナで欠席した学生については、メールで連絡がきますので、課題をメールで指示します。このように1つの授業といっても、その準備や片づけなどをいれると、ほぼ1日かかります。だから1日1科目ぐらいしか担当できなくて、授業通信まで作ろうと思うと、丸1日８時間かかってしまいます。

＜期末＞

期末になると、まず前期の期末試験が7月末から8月初旬、後期が1月末か2月初旬にありますけれど、その1ヶ月くらい前の時に、期末試験の概要を考えて、学生に事前にこういった分野で期末試験出しますよということをアナウンスします。学生の方でも試験準備をしたいという要望がありますので、 ちゃんと試験準備をできるようにはします。そして、期末試験を作成して印刷して試験をします。

試験が終了したら採点をするのですが、私は日々の授業がいっぱいいっぱいなので、本当は毎回出席のチェックをしなければいけないですが、出席のチェックがその時々にできないので、授業が一段落した時に15回分まとめて出席チェックをします。出席チェックや採点が終わったら、成績をつけて大学に報告をします。追試の必要がある学生については、別途追試を作成して、改めて成績をつけます。この採点とか成績付けの期間は、だいたい2週間ほど断続的に作業が続きます。そのため授業が終わってからも2週間くらいは、ずっと仕事しているという形になります。したがって90分しか給料は出ないですけれど、90分以外の作業とか仕事がべらぼうに多いと言えるのです。

昔、授業に遅れてやってきて、一方的にベラベラと喋って、早めに帰って授業はおしまいみたいな大学の授業がありましたけれど、今はそういうことがほぼできない状態になっています。非常勤講師の特殊事情だと思いますけれど、あんまりひどい授業をすると、この人は大学の教員としてどうなんだというふうに、やはり見なされるわけです。学生の授業評価であまりに学生からの評価が低いと、この人は大学の教員としてどうなのということが白日の下にさらされてしまうので、そうすると「来年度の雇用契約は厳しいです」と言われてしまいます。そう言われてしまうと、こちらとしても反論ができないということがありますので、きっちり授業はするし、できる限り学生に満足してもらう、そして大学にとっても納得のいくレベルの授業をするということをやろうと思うと、事前の準備なしには授業はできないということに必然的になります。

ちなみに授業評価アンケートで平均点が出ます。いわゆる偏差値です。各大学で授業評価アンケートの偏差値が出ますが、私は偏差値以下を取ったことはないです。常に上位ですし、学生からも評判がいいということがありますし、評判がいい授業するから他の先生からも別の授業でお願いしますというふうなお声がけをいただくということはあります。

６，仕事に対する思い

非常勤講師の仕事に対する思いについてですが、基本的にはいい授業をしたいという思いの非常勤講師の先生が多いかなという印象です。これはどこの大学に行っても、そういった先生が多いと思います。なぜかと言うと、いくつか理由があるかと思いますが、一つは非常勤講師は研究よりも授業に専念している方が多く、また必然的には生活するために授業しているので、授業に力を注ぐことができて、授業の質が高いということがあるかと思います。特に語学の先生はすごく工夫していらっしゃる先生が多いと思います。一方的に話す形ではなくて、学生も

スピーキングしたりだとか、リスニングしたりだとか、そういった参加型の授業にどうしてもなるので、かなり工夫していらっしゃる方が多いというのが一つです。また、先ほども言いました通り、授業評価があまりに低いと次の仕事がなくなってしまうと、常勤雇用ではないので自分自身の次年度以降の仕事を確保する上でも、やっぱり一定以上の質の授業をしなければいけないという意識が高いので、授業の質に対してはかなりこだわっていらっしゃる先生が多いかなと思います。

現在、大学の授業の1/3 ほどを非常勤講師が担当しているのではないかなと思います。実質的には非常勤講師なしには、大学の授業は成り立たず、仮に全科目をいわゆる常勤の教員の先生にやっていただこうと思うと、多分かなり授業量が増えます。しかし、非常勤講師は賃金が安すぎて生活できないということはあります。特に男性の場合は大変で、男女差別するわけではないですが、女性は家計補助的に非常勤講師をやっていらっしゃる先生も現実にはいらっしゃって、そういった場合であればそれほど不満はないとおっしゃってはいました。でもその先生方も、語学の先生なので結構たくさん授業を入れていらっしゃいました。どうしても実家暮らしではないと生活が成り立たないということがあります。私の場合は事情がありまして1人暮らしをしているのですが、現在、年収が多分230万円ぐらいでギリギリです。奨学金の返還までは難しいという状態ですから、やっぱり300万円は欲しいなということはあります。

そして研究しなければステップアップできないのに、その研究をする時間も機会もお金もないので、将来を見通せません。専業非常勤でやっていくしかないだろうけれど、専業非常勤でやっていくと来年の仕事があるかどうかわからないということがあって、そういう不安定さがしんどいなということがあります。あともう1つ、これは専門的な話になりますが、「研究者番号」というものが常勤の先生には与えられています。これは国の補助金とか、研究の補助金、いわゆる科研費というものですが、これを申請するのに必要なものです。私の場合は海外の研究をしているので、できれば海外に行って一定期間研究したいと思いますけど、その研究補助金を申請するための研究者番号を非常勤講師はもらえないです。そうするといわゆる補助金、研究費をもらって研究して、ステップアップするということがそもそもできなくて、つまり研究者として扱われていないのです。そういうことがあって、研究しなければステップアップできないのに、研究ができないという状態です。

私たち非常勤講師は一生懸命に大学を支えているというのに、その努力が全く報われないという徒労感があります。私は学生との距離が比較的近いので、学生から就職や研究の相談も受けますし、アドバイスもしますけれど、それが全く評価されないということがあります。授業という点では全く同じ仕事をしていながら、専任教員になる道を閉ざされていて、都合よく解雇される、要するに雇用の調整弁です。雇用の調整弁という言葉は、大学の労働組合に加入した時に、何人もの組合の先生から言われた言葉です。非常勤講師というのは雇用の調整弁だと組合員の先生方に言われて、「なんだそれ」と思いましたけれど、これはやはり専任教員の先生方にも、もちろん私たち非常勤講師の中にもある、共通の認識です。非常勤講師というのは専任教員になるまでの過渡的な存在で、大学にとって雇用の調整弁なんだという思いが、研究者の間には広くあります。今回の東海大学の件もそうだと思いますし、今、日本中で問題になっている10年の件、労働契約法の話も、非常勤講師とか期間付きの研究者というのは雇用の調整弁なんだ、だから首を切られても仕方がないし、ステップアップできないのも、しょうがないんだというふうに思っているわけです。

これはいわゆる形を変えた自己責任論です。私が大学を卒業した2002年も、すごく自己責任ってことを言われましたが、今、20年後になって大学の世界でも、この自己責任論というものが形を変えて言われているなと思っています。最初は一般の人に言われて、さらに公務員で言われ、今、学校の教員が言われて、大学の教員という感じです。

７，非常勤講師の労働運動と事態の打開方策

最後に、非常勤講師の労働運動と事態の打開の方策について、私からご提案します。非常勤講師の労働運動としましては2つの形態があります。1つ目が各地にある大学非常勤講師組合というものです。一番有名なのは首都圏の大学非常勤講師組合、あと関西圏にもありますし、東北地域もありますし、私たちが暮らしている東海圏にも非常勤講師組合があって、私はそちらにも加入をしています。もう1つは各大学にある企業別の労働組合です。こちらに加入するということが本来であれば好ましいかと思いますが、残念ながら大学によっては、非常勤講師の加入を規約で認めないというところが、どちらかというと多いと思います。私は今、岐阜大学の組合に入れたわけですが、むしろ積極的に入ってと言われましたけれど、他の大学は一つも加入できませんでしたし、そもそも組合がない大学もあります。「なぜ規約で非常勤講師が入れないのですか」と聞いたことがあります。教員と職員は入れるのに、非常勤講師はだめだと言われたのは、利害の対立です。前提として非常勤講師は雇用の調整弁だという考え方があって、常勤の教員と利害が対立するから、規約で非常勤講師を入れないようにしていると説明を受けました。やはり、こういった実態があります。

最後に、岐阜大学型ワークシェアというものをご説明したいと思います。これは私が加入した岐阜大学の職員組合で部分的に行っている取り組みというか、私が提案した取り組みです。非常勤講師は生活が苦しくて不安定なのですが、しかし非常勤講師が潰れてしまうと、実態として大学教員の成り手が激減してしまいます。今、国として大学院生、博士課程の院生を何とかしようと思って授業料を減らすとか言っており、ストレートに大学院から専任教員になる人もいます。しかし同時に、非常勤講師は大学の教員になるための登竜門でもあるので、非常勤講師時代を挟む人もやはりいて、そういう非常勤講師時代を経て教員になるという所を潰してしまうと、専任教員のなり手がいなくなってしまいます。

そこで、どうやったら非常勤講師を組合として支えることができるのかということを、一時期、岐阜大学の職員組合で話し合ったことがあります。というか私がいろいろお話ししたのですが、職員組合で話をすると結局、非常勤講師は雇用の調整弁だと言われてしまいます。しかし、そういう先生方も好きで大学の非常勤講師を雇用の調整弁にしているわけではなくて、今の国の大学の予算削減がかなり厳しくて、予算の帳尻を合わせるために、どこかで数字を合わせなければいけない。そうすると、すでに大学の場合は事務職員を先にカットして、さらに金がないということで設備費とかもどんどんカットしていって、それでもお金がないから一定数を賃金の低い非常勤講師にせざるを得ない状況です。しかし、そこからどうしたらいいかという議論が、岐阜大学の場合はまだなされていませんでした。

非常勤講師の最大のニーズは、例えば岐阜大学で授業をするということも大事ですけれど、岐阜大学に限らずどれだけの科目を担当しているかです。言い換えると、ちゃんと必要な金額を稼げるだけの仕事があるかどうかというところが、非常勤講師の生命線です。そこで私が提案したのは、岐阜大学の中で授業ができれば一番いいのですけど、大学を問わず非常勤講師一人一人に、必要な収入を確保できる授業時間数を確保できるように一緒に考えてほしいし、一緒に行動してほしいということをご提案しました。これはどういうことかというと、先ほども言った通り、大学の常勤の先生方はめちゃめちゃ忙しいですが、そのめちゃめちゃ忙しい中で、他の大学の非常勤講師をやっているケースがあります。特に国立大学の場合は、周辺の私立大学だとか、専門学校なんかに週に1、2回非常勤講師として行っているケースが多いのです。そういった他大学の授業でちょっとしんどいなと思う授業を、非常勤講師に融通してほしいという話をしました。あるいは学内の授業でも、もし負担が厳しいようであれば、その授業を組合に加入している非常勤講師に、優先的に融通してもらえませんかということを提案しました。

年々、常勤教員の先生方の仕事が増えていて、それは人件費をカットして人が減っているということもありますけれど、体調を崩されて休職される先生も多くいらっしゃることも一因です。こういった仕事が多すぎて困っている常勤教員の先生の仕事を、仕事が少なくて困っている非常勤講師に融通すると、利害が一致します。先ほども非常勤講師が労働組合に入れないのは利害が対立するからだと説明しましたが、このようなワークシェアという観点でやると、双方の利害が一致するわけです。これは言い換えるならば、積極的な意味での雇用の調整弁です。多すぎる仕事を非常勤講師にやってもらうという、いい意味での雇用の調整弁に変えるということを提案したため、私自身も14コマもの多くの授業を担当していますし、来年は15コマの授業を担当することになりました。この岐阜大学型ワークシェアを提案して以降、年度末の時間割の調整の時には組合の先生方から積極的に声がかかって、「この科目とこの科目できませんか」、あるいは「天池さんができないのなら誰かできる非常勤講師の人を紹介してくれませんか」というふうに、ご連絡が来るようになりました。その時に一緒に「この科目については〇〇先生がやれるじゃないかと思います」というふうに、時間割の作成に私自身も間接的に関わって参加することができているという状態です。

以上で私からのご報告にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。